香港の教育について

香港日本人学校　齋尾　正人

はじめに　香港の街について

香港日本人学校中学部からの遠望

奇妙な形の高層ビル群の間を二階建てのバスやトラムと呼ばれる路面電車が行き交う香港、その全域は広東省と接している九龍・新界とビクトリア湾を隔てた香港島、ランタオ島やラマ島などの大小二百以上もの島々で成り立っています。東京都の半分の面積に約７００万人の人々が暮らしていますが、人口は香港島や九龍などの市街地に集中し、休日ともなると銅鑼湾などの中心部は歩くことさえ困難なほどの人混みになります。

総人口の９５％が中国系の人々ですが、国際都市の名にふさわしく、街を歩けばたくさんの国々から来ている人を目にします。フィリピン人、インドネシア人、アメリカ人、カナダ人、タイ人、イギリス人、インド人など様々です。住民の大部分が広東人であるため街中では広東語が主流ですが、銀行や役所、デパートなどでは英語でやり取りし英語力も必要です。街の案内板なども中国語と英語の二通りで標記され、地下鉄ＭＴＲは広東語、中国語、英語でアナウンスされます。

また、在留邦人は約２万６千人で日系企業は２千社余りあり、日系のデパートやスーパー、レストラン、日本製の電化製品や自動車（ミニバスやタクシーも日本車）も多く、比較的身近に日本を感じることができ、地元の人々にも日本製品は人気が高いようです。なお、香港は過去に日本の植民地になった時期がありました。昨今はビジネスや旅行を中心とした良好な関係になりつつあると思いますが、反日感情も完全に消えたとは言えません。昨年問題になった反日デモは大規模ではありませんでしたが、香港でも行われました。価値観の相違をしっかり認識し、相手の立場を尊重し、誠意を持って接していくことが今後の国際理解にとって大切なことだと思います。

香港日本人学校中学部について

香港日本人学校校舎　正面玄関は5階

香港日本人学校は香港小（612 名）と大埔小（610 名、国際学級 123 名）の２つの小学部、そして中学部の３つの学校に分かれています。

中学部は寶馬山の中腹に位置し香港でも比較的静かな場所にあります。近くにはたくさんの学校が集まっており、中国系のインターナショナルスクールやイギリス系の学校と隣り合わせています。生徒数は３６４名（2005 年５月現在）ですが、１年間と通して数十名の生徒が転出入します。土地が狭い香港の宿命で、校舎

は八階建てで体育館とバスケットボールのコートが一面取れる程度のオープンやカバードと呼ばれる運動場がありますが、グランドやプールはありません。そのため、体育大会、校内駅伝大会など全校で行う学校行事は校外の施設も活用し、体育の水泳授業はスクールバスで校外の一般のプールに出かけて行います。（ただし、小学部には室内プールがあり、年間を通して水泳授業が組まれています。）また、合唱発表会は香港理工大の大ホールで行いました。

香港仔グランドでの体育大会　開会式

その他、主な行事には１年生のマカオ・珠海宿泊学習や２年生の北京修学旅行がありますが、どちらも現地の学校と交流も行います。3年生は香港での職場体験学習を行います。総合学習での班別フィールドワークや香港の大学生の交流、香港の中学校との交流も盛んに行われています。また、特色ある取組みとして、週２回の英会話の授業（小学部から始めています）も組まれています。詳しくは、香港日本人学校中学部のホームページをご覧ください。

保護者と子どもたちの様子

香港日本人学校の子どもたちの学力は、おおむね高いといえます。しかし、実態はきめ細かな指導や配慮が必要な子どももいます。保護者は全体的に高学歴の方が多く、子どもの教育にも関心も高いようです。小学校の低学年から塾やピアノ・バイオリン・バレエ・カンフーなどの習い事やサッカーやテニス・野球・水泳などのスポーツクラブに所属している子どもも多く、高学年から中学生になると、ほとんどの生徒が塾に通っています。学校の部活、週数回の塾通い、そして週末にスポーツクラブへ参加と生徒は大変忙しい日々を送っています。特に英会話の関心が高く、英会話教室やネイティブイングリッシュティーチャーを家庭教師につけたり、夏休みにはカナダやオーストラリアなどに一人でホームステイに行かせたりする家庭もあり、中学１年生で英検準二級を持っている生徒もいます。また、英語力を高めようと、日本人学校ではなくインター校（英語による授業）に通わせている保護者もいます。

香港理工大学大ホールでの合唱発表会

中学部卒業の進路は二割近くが香港のインター校で、多くの生徒が帰国して私立高校を中心（国公立が一割程度）に進学します。中にはアメリカやシンガポールなどの海外の高校に進学する生徒もいます。